

お茶の間学Ⅱ

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.jp

もり 森林をつくらう 脊振の地から

佐藤和歌子

問題の根本に気付く

山林所有者と話をして涙がこぼれたその日の夜、妹が言いました。

「NPOの仕事は魅力があつていいと思うよ。都会に出るのは、仕事に自信を持ってからでも遅くないよ。私も手伝うからやってみたら」。そう背中を押されたこともあって、一晩考えた私は「NPOの仕事、やってみようかな」と父に返事をしました。でも「山」の情報発信といっても、私自身、脊振の山村で育ったくらいで基本的なことは何一つ知りません。杉とヒノキの見分けもつかないのです。そこで父の仕事に付いていき、家業

について知ることから始めました。所有林も少しはありますが、わが家の本業は山林所有者から山に立っている木を購入し、伐採して市場に搬出する「素材生産業」。いわゆる木を育てる林業とは違う「木材業」の一種です。父は3代目で、その父から事業を受け継いだ約30年前は、入札に参加して国や県が所有する山林で作業をする仕事が主流でした。父は、個人が所有する

山林の木を購入する事業へとシフトします。そうしたことで、多くの山林所有者に巡り合いました。

父が人と違うのは、素材生産業に「山を育てる人と木材を使う人の橋渡し役」という感覚で携わっていること。だから、木材の行き先を見届けては「お宅の山から切り出した木材は、靖国神社に納めました」というように、山林所有者に報告していました。

父は言います。

「皆で植林することも大切か。いろんな人に山を思ってもらうことも大切か。でも、忘れられとるとが、どうして所有者が山から目をそらすとするとか、手入れを十分にできんのか、ということ」

「人は、山が荒れとると言っでは、努力が足りんと所有者に烙印を押す。でも、自分の財産を無駄にしたかと思う人は誰もおらん。つまり、所有者が山に夢と誇りを感じられる社会であれば、山を手放す人はおらんぞ。その根っこの問題に気付いてもらわんと、本当の解決にはならん」



間伐や枝打ちなどの手入れが不足した森林。線香のように細い木が並ぶ

山は確かに誰かの所有物ですが、その公益的な機能を考えれば、決して所有者だけのものではありません。それを再認識してもらったためには、現場からの情報発信が必要だと訴える父の言葉は、ずっと私の心に入ってきました。

(NPO法人「森林をつくらう」理事長、佐賀県神埼市)